

留まり続けていたのである。したがって、具体的なテキストの解釈をあれこれ議論するより先に、まずそれら史料を考古学的・地質学的調査の成果に対してどのように位置づけかつ扱うのかという問題について議論がなされるべきではないだろうか。ズィーズ用水路の問題に限らず、本書は全体的に文字資料の位置づけが曖昧なままに、都合よくそれらを解釈・利用しているという印象がぬぐえない。

以上のような問題はあるものの、バクリーやイブン・バットウタの記述を通じてスィジルマーサを知り、その過去の栄華にある種の憧れを抱いていた私のような読者にとっては、本書がまさに念願の著作であったことはいうまでもない。実際、先述したカペルや近年発掘調査を開始したフランスの研究チーム(p. 196)など、スィジルマーサの魅力に引き寄せられる者は後を絶たない。本書がその新たな可能性を切り開いたスィジルマーサ研究の、さらなる発展に期待したい。

引用文献

- al-Bakrī, Abū 'Ubayd. 1992. *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*. 2 vols., ed. A. P. Van Leeuwen and A. Ferre. Tūnis: Dār al-'Arabiya lil-Kitāb.
- Capel, C. 2016. Une grande hydraulique saharienne à l'époque médiévale: L'oued Ziz et Sijilmasa (Maroc), *Mélanges de la Casa de Valázquez* 46(1): 139-165.
- Lightfoot, D. R. and Miller, J. A. 1996. Sijilmasa: The Rise and Fall of a Walled Oasis in Medieval Morocco, *Annals of the Association of American Geographers* 86(1): 78-101.
- Love, P. M. 2010. The Sufis of Sijilmasa: Toward a History of the Midrarids, *The Journal of North African Studies* 15(2): 173-188.

佐藤奈穂.『カンボジア農村に暮らすメマーイ（寡婦たち）—貧困に陥らない社会の仕組み』京都大学学術出版会, 2017年, 260 p.

初鹿野直美*

本書は、「貧困」「社会的弱者」の代表的な事例ととらえられがちなカンボジアのメマーイ（夫を亡くした女性、いわゆる寡婦）を取り巻く環境を、「寡婦は貧困であるはずだ」という一般的な認識から一步身をひいたところから考察し、カンボジアの農村の柔らかな家族のありようが、メマーイがより貧しい状況に陥るリスクを最小化する方向に働いている実態を描き出す。寡婦たちの日常を資産・所得・ケアの3点から分析することで、女性・寡婦が資産や所得獲得において必ずしも不利な状況に置かれぬルールがあること、親やキョウダイ（兄弟姉妹）を中心とした親族ネットワークによる互助・支援が機能し、世帯を超えた支えあいが可能となっていること、これらによってさまざまなリスクへの対応が可能となっていることを明らかにする。

本書の構成は以下のとおりである。

- 序 アジアの豊かさを想う—夫を亡くしたカンボジア女性たち「メマーイ」の実態
- 第1章 夫を亡くした女性たちは貧困か？
- 第2章 カンボジアの社会・経済と調査村の概要
- 第3章 資産所有と相続による資産の獲得

* 日本貿易振興機構アジア経済研究所地域研究センター

第 4 章 所得と就業構造

第 5 章 子どもと老親のケア

第 6 章 メマーイの暮らし

終章 生を支える社会の仕組み

冒頭で、アジアの「豊かさ」を再考するに
いたった著者のカンボジアでの体験が語られ
る。そのうえで、ノスタルジックな感情を超
えて、地域研究および民衆学研究的立場か
ら、より脆弱で貧困な存在であるはずの寡婦
に向けられてきた外部からの視線とその実態
のギャップを紐解いていく。まずは、開発援
助の文脈でいかに寡婦が関心の対象とされて
きたのかが議論される（第 1 章）。著者は、
アメリカで寡婦の貧困が問題とされてきた流
れが、的確にターゲティングをしながら効果
的な援助を行なっていこうという国連の動き
と相まって、おのずと女性の貧困、寡婦の貧
困が途上国での開発課題とされるようになって
いったことを指摘する。国際機関が主導す
る貧困削減政策の枠組みのなかで、「女性＝
貧困」がゆえに「女性世帯主世帯＝貧困」の
議論が大勢を占めるなか、「東南アジアの
国々においては女性世帯主世帯が貧困に陥り
やすいとは言えない」という事実を指摘する
研究は注目を集めることはなかった。女性が
経済活動に積極的にかかわることが多い東南
アジアにおいては、「寡婦がその他の人たちに
比較してことさらに不利益な状況に置かれ
ることはない」という、従来のイメージに反
する調査結果がでてきても、「データの取り
扱いは慎重にすべき」と言及するにとどま
り、それ以上の深い分析の対象とされなかつ

たという。「寡婦はかわいそうな存在である」
「寡婦を世帯主とする世帯はふつうの家庭と
違って社会的・経済的に困難に直面してい
る」という視線は、先進国の固定化された幸
せな家族像から導き出されたものであるとも
いえるし、寡婦を対象とした支援の実施をし
たいという意識によって支えられてきたもの
であるともいえよう。

本論のあいだに、コラムが 3 編、「私のな
かの〈メマーイ〉①～③」として、「“かわい
そう”の背後に」「幸せな家族像が強いるも
の」「母を探す旅」が所収されている。著者
がこの問題に向き合うにいたった原体験の紹
介があり、両親の離婚・再婚、実母の死と向
かい合いながら、カンボジアの調査村の人た
ちと対話してきたことが率直に語られてい
る。これらのコラムが、メマーイを「貧困事
例」として一面的にとらえることがいかに現
実から乖離しているかという著者の姿勢と本
論の内容とに説得性を付加してくれている。

著者は、2001 年から 2010 年のあいだに、
2006 年 11 月～2007 年 11 月の 1 年間の定
住を含む複数回にわたりカンボジア・シェム
リアップ州の調査村に中長期的に滞在してき
た。村内の全 204 世帯の悉皆調査に基づき、
i) メマーイが所有する資産の実態（第 3
章）、ii) 彼女らがどのように生計をたてて
いるのか（第 4 章）、iii) メマーイが直面す
る幼子や老親のケアを誰がどのように担って
いるか（第 5 章）、といった点について、メ
マーイとその家族のライフサイクルや世帯間
の人の移動に目配りした分析を行なう。いず
れも、長く村にかかわることで得られた信頼

関係に基づく個別インタビューに基づく情報をベースに議論を組み立てている。

資産については、離別・死別時に夫婦で共有されていたものは、獲得時の事情にさかのぼって、持ち分が認められる。多くの夫婦は結婚後に妻方に居住する慣行があり、女性の両親から分けられた土地はメマーイに持ち分が認められることとなる。すなわち、資産の重要部分である土地の獲得において「寡婦だから不利」ということはなかった。そのかわり、メマーイは家庭内に成年男子の労働力が不足していることから、土地の拡大には積極的ではなかった（第3章）。生計手段としては、労働力に限界があるゆえに、農業からの収入は相対的に低くなりがちであるが、農外収入としては、伝統的な菓子をつくって売ったり、村からアクセスのよいシェムリアップでの観光産業・サービスセクターへの参入などの多様な選択肢があり、夫と一緒に住まなければならないという制約がない分、人によっては、より自由な移動が可能になり、さまざまな生計手段の獲得に成功している（第4章）。ケアの側面からは、キョウダイや親が若いうちは親の力を借りて、ときには子どもが、ときには老親が世帯を移動することで、より余裕があるものが面倒をみるということが、ごく普通に行なわれている様子が描き出される。むろん、相性の問題もあるが、狭い範囲の家族（クルオサー）のなかであれば、比較的容易に世帯間の移動（姉が夫と死別した妹の子どもの1人を引き取って同居したり、母親が離別した娘とその幼子と同居して老いてからは生計に余裕のある別の娘の

家にも出入りするようになるといった具合）が観察できたという（第5章）。以上のように、著者は、カンボジア農村にはリスクに直面した人間が貧困に陥りにくいシステムがあることを、調査村のメマーイの生存戦略を分析するなかで明らかにした。

この研究の「限界」として、著者も終章に言及しているが、調査の対象となったのは、調査の時点で村で生活をしている人たち／村で生活できている人たちに限られる。そこからこぼれ落ちる人々は、すなわち、貧困に陥らない社会の仕組みからこぼれ落ちた存在であることを意味する。たとえば、都市部で物乞いをする母子は、農村社会の仕組みから切り離されたところで生活をしている可能性が高い。著者が本書を執筆するための調査を終えた後もカンボジア社会は速いスピードで変化し続けている。都市部や海外への出稼ぎなどによる人の移動の増加、道路や電気などのインフラ整備や観光業の発展、携帯電話の普及による外部の情報と触れる機会の爆発的な増加といった変化の波のなかにあって、人々の価値観、家族のあり方、農村社会の仕組みも大きな影響を受けていることは想像にかたくない。著者の調査村での、ルースさゆえに貧しさを顕在化させないことに成功していた仕組みが、どのように変わってきているのか、しなやかに変容させながらリスクに直面した人たちを守り続けることができているのかどうか、それとも呆気なく崩壊してしまっているのか、そうだとしたらなぜか、といったさまざまな論点は、今後の興味深い課題となるであろう。

発展途上国の環境や開発問題の原因や解決方法についての議論において、「解決」にばかり焦点が置かれることで、「問題の設定自体が間違っている可能性」が見過ごされてしまうことはよく起きる問題のひとつである。間違った問題にまともに答えようとするのは、正しい問題を誤って解くのと同じくらい、もしくはそれ以上の深刻な誤りを引き起こす[佐藤 2002]。本書で扱われたカンボジアの寡婦・メマーイは、彼女たちが貧困で脆弱な存在であることを前提とした枠組みのなかで認知されてきた存在である。そこに一石を投じたのが本研究であり、メマーイの生存戦略をみていくことで、カンボジアの農村がもつ柔軟さ、家族のありようの柔軟さがセーフティネットになっていることを明らかにした。このような社会・家族のルースさが2000年代以降もなお機能し続けてきたことが明らかにされたことは、より豊かな生き方を目指す国際学研究にとっても、また現代カンボジアの社会構造を考察していくうえでも興味深く意義深い指摘であろう。

評者が学生時代に初めて東南アジアを旅したとき、無意識に「貧困」を探している自分に気づき、はっとさせられたことがある。「スラム街」といわれ案内されたその場所が、自分が想像したほど「貧しい」場所にみえずに、何か空振りしたような気持ちになった。「問題を解決したい」という動機が存在そのものは非難されるべきものではないが、その視点だけにたって状況を見ると、現実の「正しい把握」から遠ざかっていく。地域研究としては当然のことかもしれないが、多少なり

とも開発問題に関心のある立場から現地に入り込む機会を得る途上国を研究対象とする研究者にとっては、ときとして忘れがちな点である。そもそもの動機に自覚的であることは、重要な一歩であり、そのことを再確認させてくれる一冊でもある。

引用文献

佐藤 仁, 2002, 『「問題」を切り取る視点—環境問題とフレーミングの政治学』石弘之編『環境学の技法』東京大学出版会, 41-75.

〈太田至総編集 アフリカ潜在力 1〉

松田素二・平野(野元)美佐編, 『紛争をおさめる文化—不完全性とブリコラージュの実践』京都大学学術出版会, 2016年, 406 p.

田中正隆*

本書は2011年から2015年まで実施された科研共同研究「アフリカ潜在力を活用した紛争解決と共生の実現に関する総合的地域研究」の研究成果として刊行された5巻のシリーズの巻頭をなす一冊である。他の巻の各論へとつながる導入編としても、地域や分野などで多岐にわたる共同研究の到達点としても読める緻密な構成の論集となっている。つまり、中心概念である「アフリカ潜在力」について本書冒頭の2章と末尾の終章において入念に説明され、各論稿においてもこの概念からのアフリカ理解への寄与が意識されて

* 大谷大学文学部